

俳壇

竹前・石田・加藤さんに

今井 聖選

【期間賞】

叱られし後も炬燵に入りしま
ま

(長野市) 竹前 正人

【評】炬燵に入っていた側が
誰かに叱られた。二人とも炬
燵にいたのかもしれない。叱
った側はフイと炬燵を出て行
ってしまった。叱られた側は
失意のためかますますさから
かあるいはふてくされている
か、とにかく炬燵に入ったま

竹前正人さん

まである。叱られた側の「思
い」が炬燵にとどまらせてい
ることで複雑な胸中がうかが
える。動作から内面をうかが
うことのできる見事な作品で
ある。

【次席】

春の市ひとほり見て味噌を
買う

(松本市) 田中しほす

【評】市は食品の市とは限ら
ない。骨董でも衣類でも何で
も良い。惹かれるものをさま
ざまに見て回って、さあ買お
うかという段階になってやは
り日常に不可欠なものに思
いが至った。「やはり味噌に
しよう」と決意したのだ。お金
を何に使うかという選択に至
ったとき、人は最優先のもの
として「食」を挙げるであら

坊城 俊樹選

【期間賞】

木枯らしや乳房に字らを抱く
母

(佐久穂町) 石田 弘子

【評】母というものはわが子
を慈しみ愛しそして守る。そ
れが母性というのならば、こ
の句は母性そのものの句。や
はりそれを象徴するものは



石田弘子さん

う。衣食住というがやはり
「食」が最優先だ。この句は
そう言っている。

「乳房」であろう。子にとつ
てそこが一番暖かで安全な場
所。外に木枯らしが吹き荒
れようが、その日が来るま
での安住の地なのである。し
かし子とはいずれそれに対
峙せねばならない。すなわち
「木枯らし」という季節は母
の暖かさに対峙する運命にあ
る。

【次席】

裸木に頬寄せて耳寄せて抱く

(飯綱町) 小林 紀子

【評】冬になり枝々が裸のよ
うに丸見えになってしまった
木。一見命が尽きたようにも
見えるのだがまだまだこれか
らの命を秘めている。そんな
木を慈しむように、頬を寄せ
耳を寄せて命の鼓動を確かめ
て抱く作者。そこにある慈愛
こそが俳句という詩の持つ生
命力そのものなのかもしれない。
そして、あらゆる生命体

神野 紗希選

【期間賞】

ケブラー1649c碧しソー
ダ水

(小諸市) 加藤 陽介

【評】ケブラー1649cは、
約3000光年彼方の惑星だ。

地球によく似た星で、水もあ
るのではと考えられ、人類の
移住先として期待されている
とかいないとか。彼方に浮か
ぶもうひとつの地球。ソーダ
水に地球のみずみずしさが弾



加藤陽介さん

へ愛情を寄せる日本人とい
うものの特性なのかもしれな
い。

け、光年の距離にふと涼しさ
も寄せてくる。ささやかな身
ほとりの出来事が広大な宇宙
と直結するのは、短い俳句ゆ
えの大胆な詩的飛躍だ。人間
の想像力の自由がほとばしる
一句。

【次席】

徘徊も旅する心蝶の屋

(箕輪町) 向山 政俊

【評】徘徊とは、あてもなく
歩き回ること。近所をぶらぶ
らするとき、ふと兆す旅心。
あるいは認知症の徘徊も、旅
をしたいという心の表れなの
かもしれない。ややもすれば
困った行動を、見方を変えて
肯定した。「俳諧」も「はい
かい」と読む。芭蕉の昔から、
旅は俳句の重要な主題だ。春
の日に飛び交う蝶をながめ
ていると、なんだか遠くまで
来たようで、不思議とうれし
くなる。